

## 第2回 都立高校の魅力向上等に係る懇談会専門部会（第三部会）

### 議事要旨

日 時：令和8年9月7日（月曜日） 午前10時から正午まで

会 場：都庁第二本庁舎 31階南側 特別会議室 25

出席委員：6名

#### 1 開会

#### 2 議事

##### （1）産業教育

##### ○ 生徒の興味・関心を踏まえた分野横断の学び

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 分野横断の学びを進めるに当たり、生徒が関心を持つ課題を起点として興味・関心を喚起し、課題解決の全体像の中で各分野の知識や技術の必要性を理解できるようにすることが考えられる。その上で、他の専門高校の取組について相互理解を深め、協働するために学ぶ形が望ましいのではないかと。
- ・ 分野横断の学びを進めるに当たっては、なぜ産業分野を横断して学ぶのか、その必要性や全体像を生徒が理解できるようにする必要がある。全体像の中で自分がどのような位置付けで、今後どのように学んでいくのかを理解することが、興味・関心や今後の専門分野の学びへの動機付けにつながるのではないかと。
- ・ 専門高校については、従来の就職準備を中心とした役割だけでなく、生徒が探究する面白さを身に付け、自ら学び続けながら将来の進路や人生について考え、自分の人生を主体的に築いていくための基盤を育む場として捉えることが考えられる。また、高校を核として中学校や大学、企業等との連携を図りながら、多様な体験や探究活動を通じて、自らの進路や将来を考えられる学びの構築が必要ではないかと。
- ・ 教育課程の検討に当たっては、実習に必要な施設・設備や実習用地、教員体制などの実現可能性を踏まえる必要がある。
- ・ 分野を横断した学びで他分野について実際に触れる経験は、後々大きな教育的価値を持つ可能性があり、長期的には3分野を融合するような活動に結びついてくのではないかと。

##### ○ 分野横断の学びを支える実習環境の確保・整備

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 都立高校は農業高校、工科高校、商業高校等が比較的近接して配置されている強みがあることから、既存施設を活用しながらテーマ別の学校群を形成することが考えられる。学校群ごとにアグリやモビリティなどのテーマを設定することで、中学校での探究活動との接続や魅力発信がしやすくなるほか、企業や大学もテーマに応じて参画しやすくなり、学びの内容や進路のイメージを分かりやすく示すことができるのではないかな。
- ・ 施設整備や費用面を考えると、1つの場所に多様な分野を集約するよりも、農業・工業・商業の各拠点が連携する方が現実的ではないかな。分野横断テーマごとのプロジェクトを設定し、農業・工業・商業それぞれの役割を理解しながら進める形がよいのではないかな。また、課題探究に加え、利益やコスト、社会への還元といったビジネスの視点も取り入れていくことが重要ではないかな。
- ・ 生徒が自らの将来や進路について考えられるようにするためには、様々な体験活動や社会との関わりを持つ機会を充実させることが重要である。農業・工業・商業といった従来の枠組みにとらわれるのではなく、学校間で学びを組み替えられる仕組みや、多様な体験を通じて自ら学びを選択できる教育環境が求められるのではないかな。また、設備整備だけでなく、大学や企業、地域と連携しながら実社会で学ぶ機会を充実させることも必要ではないかな。
- ・ 将来的には1つの学校の中で多様な分野を学べる仕組みが効果的と考えられるが、新たな学校整備には課題も多いことから、当面は施設を有する学校を拠点としながら、学校間や大学、企業等との連携を進めることが現実的ではないかな。また、各学校の特色や連携によってどのような学びが可能なのかを示すことで、入学を希望する中学生にとって学びの内容がより分かりやすくなるのではないかな。
- ・ 学校内の施設や実習用地を確保することに加え、地域に既に存在する施設や土地、小規模事業者等の資源を教育活動に活用していくことも考えられる。一方で、小規模事業者等と学校との連携には接点づくりの課題もあることから、双方をつなぐ仲介的な仕組みを設けることで、生徒の実習や体験の機会を広げていくことができるのではないかな。

#### ○ 分野横断の学びにおける教員・外部人材の活用

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 民間企業等との連携においては、公立学校では人事異動により関係性が途切れてしまうことが課題である。テーマ別の学校群を形成することで、学校単位ではなく学校群単位で外部との関係性を維持するシステムなどの検討が必要と考える。
- ・ 自治体と民間企業を結び付ける官民連携プラットフォームのように、学校と企業等の外部人材をマッチングする仕組みを構築することが考えられる。また、デジタル上で

データを管理することで、人事異動等によって関係性が途切れることを防ぎ、継続的な連携につなげられるのではないかと考えられる。

- ・ 地域や企業の人材を学校に招くだけでなく、生徒が企業や地域の現場で実習や体験活動を行えるような仕組みづくりも考えられる。
- ・ 外部人材の活用にあたっては、持続的な連携を可能とする方策についてもあわせて考えていく必要があるのではないかと考えられる。

## （２）高大連携

### ○ 大学との連携による生徒の学び・学習環境の充実

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 大学との連携にあたっては、進路選択の段階に限らず、より早い段階から、大学を探究の問いの種と出会う場として活用することが考えられる。また、高校生の探究テーマと大学の研究領域や研究者とを学校横断的に結び付けることで、高校生の探究を深めるとともに、大学の研究者にとっても意欲のある高校生と出会う機会になるのではないかと考えられる。
- ・ まずは高校生と大学生との交流機会を設けることが考えられる。そこで関心を持った研究について、大学の授業への参加や大学教員とともに課題を考える活動につなげることで、高校生が大学での学びや将来を具体的にイメージできるようになるのではないかと考えられる。また、こうした交流の場として大学の施設を活用することも考えられる。
- ・ 高大連携については、大学のゼミの見学など、より小さいステップから大学の探究的な学びに触れる機会を設けることも考えられる。また、このような取組は高校生だけでなく大学生にとっても学びの機会になるのではないかと考えられる。
- ・ 大学等が実施する研究プロジェクトと、関心を持つ高校や高校生とを東京都がマッチングさせることで、高校生が研究活動に参画できる機会をつくることが考えられる。

### ○ 大学との連携による教員の指導力向上

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 教員が全てを抱え込むのではなく、生徒に寄り添いながら伴走支援する力が求められるのではないかと考えられる。また、高度化・専門化する学びに対応するためには、大学教員等に委ねたり、生徒を学校外の学びへ送り出したりしながら、学びをコーディネートする力なども必要と考える。
- ・ 高大連携の実践の中では、教員自身も生徒とともに学びながら関わる事例があった。教員と一緒に学ぶことで生徒とよりよい関係ができていくとよいのではないかと考えられる。
- ・ 高校教員と大学教員との交流を深めることで、相互理解を促進していくことが重要であり、交流の深化により、例えば探究活動において適切な連携先につなぐための

知見を得られるなどの副次的な効果も期待できるのではないか。

- ・ 大学のゼミを見学することは、高校教員にとっても探究の指導方法を学ぶ機会になり得るのではないか。
- ・ 探究において外部人材を活用するとしても、最終的には、教員が、生徒の学びを支える・促す中心的な役割を担う必要がある。一方で、探究活動を支えるためには多様な支援者が必要であるが、現状の教員数では、教員が疲弊するだけになってしまうため、指導体制の整備については、人間的な観点からも考えていく必要がある。

## (2) 部活動

### ○ 部活動の魅力・活動水準の向上・生徒の意欲に応える指導体制の充実・安心して活動できる環境づくり

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ プレミアクラブの取組は推進していくべきであり、施設や備品等への重点的な支援が活動に役立つと考える。また、部活動には生徒が主体的に課題を解決しながら成長できる教育的意義があることから、その価値を大切にしていける必要があるのではないかと。さらに、指導体制の充実や、生徒が安心して活動できるための支援も重要ではないかと。
- ・ 東京都には体育大学やプロ選手、オリンピック・パラリンピックのレガシー施設などの資源があることから、それらを活用しながら学校をまたいで生徒を育成する仕組みを検討してはどうか。
- ・ 私学ではないような、学校をまたぐ指導者間の交流を通じて競技力向上を図る取組は都立高校で進められるのではないかと。特に施設等の制約がある競技では、学校を越えて活動する仕組みも考えられる。

## 3 事務連絡

### ○ 次回開催日程について

- ・ 第3回 10月以降の開催を予定。

## 4 閉会